〈投稿〉

要約文を書く力をつける英語Ⅰの指導
―― *Genius I* を使って

石本祐子

はじめに

Genius English Course I を使用して高校１年生の授業を担当していたころ，高校生になって半年以上経つのに，複数の意味を持つ単語の意味から，どう考えても文脈に合わない意味を生徒が選択するのが気になりだした。もちろん，生徒の英語力不足，一般教養不足も原因であろうが，単なる訳読式であると，１文１文にしか注意が向かないのも原因であろうと思われた。

そこで，筆者は，文脈を意識した英文の読みを指導するために「読んだりして得た情報について整理して書く」ことを目標にした授業を行った。以下にそれを紹介したい。なお，ここで紹介する“My Brother's Keeper”は，*Genius English Course I Revised* にも掲載されている。

Bottom-up 方式から Top-down 方式へ

いわゆる読解には大きく分けて，「単語→句→節→パラグラフ」と進んでいく Bottom-up 方式と，テクスト全体やパラグラフ理解に重点をおいて読み進む Top-down 方式の２つがある。筆者は，レッスン１からレッスン９まで Bottom-up 方式で学んだ生徒に Top-down 方式の読解を行わせ，要約文を書くことを最終目的とする授業を試みた。

まず，１レッスン全体の流れを把握させるために，教科書指導資料の CD-ROM を利用して，B4 の用紙に，レッスン10 “My Brother's Keeper”の全文を編集し直し，段落ごとに番号をつけて印刷した。（このように編集し直すと，生徒が何度か受験している模擬試験の長文問題の量とほぼ同じであり，大学受験を乗り切るためにも，１レッスン分の英文を一気に読む力が必要なことを納得したようだ。）そして，もう１枚，本文に付けた段落番号に付合するように，番号をつけた欄を付けた B4 のまとめ用紙をつくって生徒に配った。

このレッスンは作者の経験をもとにした物語文なので，最初の時間に教科書の脚注，挿絵などを参考に，わからない単語があっても最後まで本文を通読させた。また，タイトルについても，話を読み終わった時に意味するところがわかればよいことにした。そして，２度目の読みの時は，段落毎に，登場人物と大まかな出来事の流れをまとめさせるようにした。日本語の短文でまとめるのが原則であるが，英語が苦手な生徒には，大事と思われる単語を抜き出すだけでもよいことにした。

このようにして，２度の通読を終わらせた。段階で，わかったことを発表させ，全員で本文の流れを確認した。その時の発表に関しては，あまり厳密な答えを要求しないで，大まかな流れをつかみ，これから読む話がどのような場面で，どのような登場人物がいて，どういう流れになっているのかということに段落を意識させながら関心を向けるようにした。また，自分にとってどこが理解しがたい箇所であるかも認識させるようにした。

精読とまとめ

この方式を導入するまで，文法の説明を中心とした訳読を行っていたので，訳読は続ける事にし

た。しかし，段落を意識させるために，１段落読んだら必ずまとめ用紙に立ち戻り，自分のまとめを点検させ，１回目の要約で不十分な所を補足させた。このようにして，最後まで本文を読んだ。

本来ならばここで，すぐに英語の要約文を書かせたいところであるが，いきなりは無理だろうと思われたので，まず，日本語で800字以内の要約文を書かせることにした。レッスン10は，作者が“Ｉ”という一人称で回想するという形になっているので，「筆者は」という形で要約をするように指示した。また，何でもかんでも書くのではなく，話の流れが要約文を読む人に伝わるように心がけるように指示した。

日本語の要約文を書かせて点検した後，いよいよ英語の要約文に取りかかったが，日本語の要約文を英訳するのではなく，教科書の本文をなるべく利用するようにさせた。まず，The author で文を始めると，英語では人称が変わり，動詞の形や代名詞が変わることに注意しないといけないが，これは生徒にはなかなか大変な作業であった。これには，やはり，英語の苦手な生徒ほど悪戦苦闘していた。机間指導でこの種の誤りを見つけるたびに直させたが，同じ誤りを繰り返す生徒が多かった。

発表

大変ではあったが，何とか要約文を完成させた。英文をあまり厳密に点検すると，英語が得意でない子の意欲を殺ぐ恐れがあるので，ひどい文法的間違い以外は，生徒の書いた文を尊重し，要約文が完成した生徒から，発表練習に移った。ひとりずつ生徒を呼び，英文を読ませ，発音，イントネーション等の注意をした。

その後，いよいよ１人１人が全員の前で，自分の要約文を発表することになった。なるべく原稿を見ないで発表するように指示したが，最初ということもあり，ほとんどの生徒が，原稿を見て発表していた。

今後に向けて

段落を意識した Top-down 方式を一部取り入れて１レッスンの授業はどう変わったか。

まず，今までの訳読中心の授業よりも５時間ほど時間が多くかかってしまった点は反省しなければならない。しかし，レッスン10は仮定法過去，仮定法過去完了が新出の文法事項であるが，「現在の事実の反対の仮定」，「過去の事実の反対の仮定」ということが，文脈を意識した読みの中では生徒が理解しやすいようであった。また，絶えず段落に立ち戻ることで，話の流れが否が応でも生徒の頭の中に入りやすく，従来のやり方のときよりも，話の流れを忘れることがなくなった。さらに，段落のまとめをしなければならないので，生徒は自ずと英文を何度も読まなければならなくなった。

本来は，要約文の発表のみならず，それに対する自分の意見も英語で発表させたいところであるが，まだ，そこまでは生徒に要求していない。

次のレッスン11も同じ方式で授業を進めたが，やり方のコツをつかんだせいか，段落のまとめにかかる時間が減った。

また，生徒同士の合評も取り入れたし，２回目の発表時，２名の生徒が原稿を見ないようにして前を向いて堂々と発表してくれたのは嬉しかった。また，英文の要約文に前レッスンよりも工夫する生徒が増えた。生徒は基本的に向上心を持っていることを改めて知った。

今後も文単位の理解に止まることのない英語Ｉの授業を目指し，工夫していきたい。教科書があるとどうしても，全部教えることを目標としがちであるが，進度に捕らわれることなく１レッスンを色々な角度から迫って行く方法もあるのではと思うようなった。

（いしもと　ゆうこ・旭川明成高等学校教諭）